

OG訪問



卒後5年目の西村希美さんが勤務するのは
手稲山の自然を望む手稲溪仁会病院。
在学中に成人看護学実習を行った同じ病棟で
いまは後輩の指導にも活躍する中堅の仲間入りです。

医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院 看護師

西村 希美 さん (看護福祉学部看護学科2009年卒業)

この病棟で実習生から看護師へ

札幌市北西、JR手稲駅すぐそばに手稲溪仁会病院の建物が立ち並びます。救急科を含む33の診療科、地域がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、地域災害拠点病院、ドクターヘリ、ロボット支援手術など今日の医療のキーワードが揃い、道内のマスコミにも度々取り上げられる病院です。

卒後5年目を迎えた西村さんが勤務するのは「泌尿器・腎センター」(泌尿器科、腎臓内科、循環器内科の病棟)、本学在学中に成人看護学実習を行った病棟です。「臨地実習の中で最も大きな達成感を得た」という西村さんはこの場所を就職先の第一志望とし、その熱意が受け入れられ看護師として就職をかなえました。

患者さんの持つ力に着目

西村さんは主に、道内でいち早く導入されたロボット支援による前立腺全摘出をはじめとした周手術期ケアや、透析療法で入院された患者さんとご家族の生活支援などの看護ケアを行っています。

様々な治療を受ける患者さん一人ひとりが持っている力に着目して、その人らしい生活を患者さんと一緒に考えていくことが看護師の大切な役割です。そのためには患者さんを一人の人間とし



患者さんの元へ向かう西村さん。ポケットの中にはいつも本学の卒業記念品の電卓が入っています。

て包括的に理解することが欠かせません。西村さんは「病棟での生活の援助を通して患者さんに寄り添い、信頼関係を築くという看護の基本を大切にしています」と言います。

終末期の心に寄り添って

手稲溪仁会病院看護部の継続教育は、キャリア開発リーダーが明確に示され、途切れることなく高いモチベーションを持ち続けられる環境を重視した構成になっています。西村さんの「寄り添う看護」への強いこだわりも、2年目の研修で得た経験からでした。

一人の患者さんに関わった看護を、文献を用いて振り返り、ケアの評価を行う研修です。西村さんは末期腎がん患者さんを受け持ちました。緩和ケアを受ける患者さんとの2か月は、西村さんの使命感を強く刺激しました。「激しい身体面と

精神面の痛みをほとんど言葉にしない方でしたが、一生懸命患者さんの今に寄り添うことで、徐々に心の内を明かしてくれるようになりました。私にとっては命そのもの、尊厳ある最期の迎え方に真剣に向き合った時間でもありました」。身体的な痛みのコントロールは薬でできますが、心の痛みには近くにいる看護師の存在が深く関わることが、西村さんの心に刻まれました。



病棟内に2つある看護師チームのリーダーの一人として滝澤英毅医師(腎臓内科部長、透析室長)の指示を受ける西村さん。医師からの信頼も厚いことが、スムーズなコミュニケーションからわかります。

育てる喜びがわかるように

組織の中での役割、責任も徐々に大きくなりました。3年目の後半にはリーダー業務を行うようになり、病棟内の患者さん一人ひとりの看護についてチームメンバーと共に考えています。新人看護師や、中途採用看護師の支援も行っており、「看護の意味や手順を改めて確認する機会に」と、自分の成長にもつなげています。かつて指導した新卒看護師が今は後輩を指導している姿に、育てる喜びも味わえるようになりました。

「看護師1年目は、環境の変化にリアリティショックを受けるかもしれません。でも、それを乗り越えたところに力を尽くす価値のある世界が見えてきます。看護師とは素晴らしい職業であると日々実感しています」。

西村さんはじめ本学卒業生の存在は、後に続く者の励みと安心です。西村さん、これからも後輩の指導、よろしくお願ひします。



処置室で検査を受ける患者さんの不安を和らげるのに、西村さんの笑顔はよく効くようです。



この病棟の看護師6人が本学卒業生。取材時は5人が勤務中でした。左から谷田衣理奈さん(2011年卒)、扇田祐樹さん(2012年卒)、西村さん、宮間史保子さん(2013年卒)、鈴木捷允さん(2013年卒)。「男子卒業生も数多く活躍中ですよ」と西村さん。